

異文化研究交流センター ニュースレター

猛暑のあと

センター長 坂本 千代（国際文化学研究科 教授）

当センターの活動は前期より後期のほうが行事が多く忙しいのですが、9月は少し時間的に余裕のある時期です。たいへんな猛暑の夏のあとですから、ぜひ穏やかで美しい秋、食欲と勉学の秋になってもらいたいものです。さて、良いニュースがあります。センター協力研究員の阿拉木スさんが、第12回アジア太平洋研究賞(井植記念賞)を8月に受賞しました。また、常勤の研究職が決まった協力研究員もいます。センターの組織を活用して教員、研究員、学生が自分の研究をさらに広げ深められる機会をこれからもたくさん作っていきたいと考えています。

今年に入ってから IReC ではさまざまな行事を開催してきましたが、その中には、同じ研究科内のもう一つのセンターであるメディア文化研究センターと協力しておこなったものがあります。5月10日（金）には明治大学から高山裕二 講師をお招きし、IReC『南北アメリカにおける異文化の共存・葛藤・融合』プロジェクトとメディア文化研究センター『メディアの変容と文化の公共性』プロジェクトの共同研究セミナー「アレクシ・ド・トクヴィルの異文化体験」を開催し、学内外からの参加者を交えて活発な議論がありました。また、両センターの学術推進研究員と協力研究員有志が「コミュニティの『共創』戦略と市民的公共性」というプロジェクトを立ち上げ、その第1回研究会「ベトナム反戦から内なるアジアへ——ベ平連神戸の軌跡」（発表者：黒川伊織さん、メディア文化研究センター協力研究員）が8月6日（火）におこなわれました。このプロジェクトは今年度中にまだいくつか催しを予定しています。

このように国際文化学研究科内のふたつのセンターが共同する企画が目立つようになる一方で、両センターができて数年が経過し、神戸大学、本研究科およびセンターを取り巻く状況は大きく変化してきています。そこで、両センターがこれまでおこなってきた活動の成果をふまえ、当初予想されていなかった問題点やあらたな可能性などを考慮し、ふたつのセンターをひとつにして体制の強化を図り、より効率的で研究科の現状にあった組織にするための準備が始まりました。ふたつの既存の組織を融合しようとしているわけですから、さまざまな問題・課題を解決しなければなりません。スムーズに統合計画が進むかどうかはまだわかりませんが、メディア文化研究センター長と協力して、猛暑のあとを「改革の秋」にしてがんばっていきたいと思います。



「アレクシ・ド・トクヴィルの異文化体験」
(5月10日)会場の様子

● 2013年度学術推進研究員 清川 祥恵

● 2013年度協力研究員と研究テーマ

- ・アラムス「清代内モンゴルにおける農地所有とその契約に関する研究
——帰化城トウメト旗を中心に」
- ・尹 永 順「『盛京時報』と谷崎文学」
- ・植 朗 子「グリム兄弟『ドイツ伝説集』におけるモティーフ研究」
- ・王 娟「日本占領下の華北地方における教育活動」
- ・鬼頭尚義「歌人伝説の形成と展開」
- ・シーリン「清代モンゴルにおける書記 および 書記の養成に関する研究」
- ・高岡智子「東ドイツとハリウッド映画音楽の比較研究——文化政策とメディア史的観点から」
- ・寺尾智史「『リキッド化する社会』における言語多様性保全」
- ・南郷晃子「近世紀における領主権力をめぐる説話の生成と展開」
- ・沼田里衣「音楽療法、コミュニティアートにおける創造的音楽活動について」
- ・野村恒彦「19世紀英國科学者の大陸旅行（グランドツアーワーク）」
- ・松井真之介「フランスにおける多文化共生と多文化教育の可能性——地域語学校・バイリンガル学校を例に」
- ・山口隆子「ホームステイ活動における伝統と生活文化の表象」、「ホームステイのメカニズムを観光人類学から読み解く」
- ・山田勲之「清代雲南ナシ族に関する歴史研究——ナシ族の首領木氏を中心に」「チベット自治区ラサ市における観光産業発展の動態」
- ・劉澤軍「文の結束性に関する中国人日本語学習者の使用実態について」

2012・2013年度活動報告

(2013年1月～9月)

研究部

(部長：坂井一成 教授)

研究部では、2012年度は「EUの内と外における共生の模索」をテーマに研究活動を進めてきました。2013年1月11日に九州大学の八谷まち子氏を招き、アラブの春というEUの南岸に当たる地中海地域での政治・社会変動を背景に、トルコのEU加盟問題がどのような意味を持ってきているかについて議論を行いました。ヨーロッパとアジアの境界、キリスト教世界とイスラム教世界の境界に位置するトルコは、まさにEUが内と外とで共生を進めていくための様々な課題が露見する場となっていると言えます。



「アラブの春とトルコのEU加盟の新たな課題」(2013年1月11日)
講演会で談笑する八谷まち子氏（左）

研究部プロジェクトの一環として、2月6日にはブリュッセル自由大学(VUB)（蘭系）を会場に、「政治・経済・社会の劇変とEUにおけるアイデンティティ形成」をテーマに日欧国際ワークショップを開催しました。ここでは、Kolja Raabe氏（ルーヴァン・カトリック大学）、齋藤剛氏（神戸大学国際文化学研究科）、村尾元氏（神戸大学大学院国際文化学研究科）、Noemi Lanna氏（ナポリ東洋大学）から報告を得て、コメンテーターとして西田健志氏（神戸大学国際文化学研究科）、松井真之介氏（神戸大学国際文化学研究科メディア文化研究センター）、Dimitri Vanoverbeke氏（ルーヴァン・カトリック大学）、岩本和子氏（神戸大学）



ブリュッセルワークショップ（2月6日）の参加者

国際文化学研究科による議論の提起と、ヨーロッパ・日本の多くの研究者・学生を含むフロアを交えた全体討論を行いました。これらを通じて、①「アラブの春」がEU市民のアイデンティティや政治意識にもたらした影響、②EU内でのアイデンティティ形成におけるソーシャルメディアの重みの増加、③EUにおけるアイデンティティの変化が日EU関係といった対外関係に及ぼしている影響について議論が行われ、EU研究の深化とともに日欧の研究協力の深化とネットワーク拡大においても進展を図ることができました。

2013年度は、「EUアイデンティティの構築とその政治的意義」をテーマとして講演会・研究セミナーを行ってきました。7月25日の川村陶子氏（成蹊大学）を講師に迎えての講演会では、ドイツの対外文化政策の変容について、20世紀から21世紀にかけての長期スパンのなかでこれを捉え直し、とくに第二次大戦後のEC/EU統合の進展のなかでの位置付けや変容について議論を深めることができました。



「分断から統合へ?」(8月1日)
講演する川村陶子氏



「ドイツ対外文化政策の変容」(7月25日)
上：川村陶子氏、下：会場の様子

8月1日に行った研究セミナーは、仙石学氏（西南学院大学）を講師に迎え、EU統合を含めた国際政治環境の変化のなかでのポーランドの国境線をめぐる政治・社会・文化状況の変化とその意義について、コメンテーターとしての青島陽子氏（神戸大学国際文化学研究科）による議論も踏まえ、EUとの境界線について、アイデンティティをめぐる政治問題の観点から熱い議論が交わされました。

EUをめぐっては、加盟国拡大と近隣地域との微妙な関係構築が進められるなかで、統合の深化・拡大における文化的要素が果たす役割について一層の解明が求められており、今後ともその探究に勤しむ必要が明らかになってきたと言えます。

国际部

(部長: 岩本和子 教授)

国際部は、国際交流委員会管轄の海外協定校とのコネクションも生かしつつ、国際交流促進、特に海外の研究者との学術交流に重点を置き、中心的な活動として海外の研究者による講演会の開催を行います。教員や院生、さらに学部生にも広く聴講を呼びかけ、学術交流とともに、交換留学やダブル・ディグリー・プログラム留学への意識を高め、外国語での講演聴講に慣れる機会ともなっています。今後の、協定校との教員交換授業の促進、準備にも貢献できると考えています。

2013年1～9月には次の活動を行いました。2012年度第5回講演会として、協定校のレンヌ第1大学経営学部Karine PICOT-COUPEY准教授による“Understanding Growth Strategies in Retailing: From Internationalization to the Development of New Retail Formats”（2月22日）を開催し、研究科・学部初の海外からの出張集中講義中でもあり、学生や研究科内外の教員の参加がありました。フランスのファッションマーケティングに関する最新の研究のご紹介を軸に、Pop-up storeの紹介、日仏の比較など興味を惹かれる内容でした。講演も質疑応答も英語でしたが学生からも活発に発言があり充実したものになりました。



"Understanding Growth Strategies in Retailing" (2月22日)
Karine PICOT-COUPEY
先生と会場の様子

年度末には2013年度に国際部主催で行った5回の講演会での発表内容をすべて報告書に掲載し公表しました。

2013年度第1回講演会として、リエージュ大学（ベルギー）のJean-Marie KLINKENBERG 名誉教授による「*Les littératures francophones septentrionales : constances et convergences* 北方フランス語圏文学の特徴と共通性」（5月27日）を日本フランス語教育学会(SJDF)などの後援も得て開催しました。文化の絶対的な中心地フランスに対するフランス語圏周縁地域、特に北方諸国の文学の特異性と意義を探るもので、言語や文学を通して異文化理解の問題も考えさせてくれました。学部生の参加も多く、またや学外から多くの方にお集りいただき、フランス語による講演（通訳は学

振特別研究員PDの三田順氏)と質疑応答(通訳補助岩本和子)が、講師のエネルギッシュな人柄もあって、活発に行われました。



「Les littératures francophones septentrionales: constances et convergences 北方フランス語圏 文学の特徴と共通性」（5月27日）



また第2回講演会として、10月1日にヴェネツィアカ・フォスカリ大学の Fabrizio EVA 客員教授による「European Vision of the Global Geopolitical Dynamics in Comparison with the Asian (and Japan) Perspectives」を開催するほか、本年度中にさらに2、3回の講演を予定しています。国際部が現体制になって2年目に入りましたが、このように順調に活動ができていますのも、教員の皆さまの海外での活発な研究活動や交流に支えられてのことですし、改めて本研究科の国際交流ネットワークの広がりと強さを感じました。また国際部の活動自体もこれから一層の学術交流促進の一助となれば幸いです。

連携事業部

(部長:岡田浩樹 教授)

連携事業部の活動は、(A) 連携協定に基づく地域連携事業、(B) アートマネージメント関連事業、(C) JAXAとの連携協定に基づく事業の3つのカテゴリーに区分されます。2012年1月から9月まで、それぞれのカテゴリーで盛んな活動を行いました。

A 連携協定に基づく地域連携事業

連携協定に基づき、(1) 兵庫県国際交流協会、(2) 在日外国人支援諸団体、(3) 南あわじ市と地域連携事業を共同で実施しました。

(1) 兵庫県国際交流協会が主催する Oxbridge English Summer Camp の実施校として、英国 Oxford, Cambridge 大学の海外英語教育実習に協力、8月5日から18日までの2週間、英国から6名の学生が来日し、国際文化の学部生40名が参加して英語のレッスンを受けると共に、交流を行いました。また、兵庫県国際交流協会が実施した「地域の国際交流プログラム」にCamp参加学生も参加し、地域住民との交流も行いました。



2013 Oxbridge ミニツアー集合写真

(2)については、神戸定住外国人支援センタにおいて、国際文化学研究科大学院生と地域住民や他大学の研究者との研究会（通称「長田研究会」）を月に一度のペースで開催とともに、学生ボランティアの派遣などを行いました。

(3)については、昨年度に引き続き、南あわじ市で開催されるアジアこども国際映画祭の実行委員会に岡田教授が加わり、企画・運営に協力しました。

B アートマネージメント関連連携事業

藤野教授のアートマネージメント研究会を基盤として、神戸芸術祭における企画参加、研究会の開催に加え、ドイツからの研究者を招聘し、2013年3月11日(月)に「国際文化交流フォーラム」を実施しました。そのテーマは「自治体の文化振興はどうあるべきか？　ドイツの先進事例から考える」です。会場の神戸市中央区の生田文化会館大ホールは120名を越える参加者がありました。慢性的な財政難と行政改革によって先進国の自治体文化政策にも構造転換の荒波が押し寄せています。ドイツの公共文化予算は日本の10倍以上ですが、地方自治体が主体となっていった点では共通しています。このフォーラムでは、日独の文化政策研究の第一人者が参加

し、地域主権にもとづく文化政策の先進国であるドイツの理念と実践事例をふまえて、自治体の文化振興は本来どうあるべきかについて根本から考える時期に来ています。この課題をめぐり、ドイツ・ヒルデスハイム大学文化政策研究所所長のシュナイダー教授の基調講演に続き、同研究所研究員のゲツキー氏がEU特にドイツとEUにおける報告を行い、帝塚山大学の中川幾郎教授、静岡文化芸術大学の松本茂章教授が日本、そして神戸に関する報告をされ、活発な討論を行いました。

C JAXAとの連携事業

国際文化学研究科は、2011年6月にJAXA（宇宙航空研究開発機構）大学・研究機関連携室と連携協力交流協定を締結しました。2013年4月から連携協力事業の一つとして、人文社会科学系の学生に対する宇宙教育を目的とした「宇宙文化学」を開講しました。他大学の研究者に加え、JAXAからは4名の講師が派遣されました。またJAXAの施設（JAXA相模原キャンパス）を使った学外見学を実施しました。JAXAとの連携講義は、IT、GPS、衛星放送など、グローバル化の背景となった宇宙開発技術とそれがもたらす社会的・文化的変化の問題に学際的にとりくむ内容であり、国際文化学部の学際的性格、今日的課題に取り組む姿勢を涵養するという教育理念に合致します。また21世紀に必要な専門的教養を修得させる意味でも、有益な内容となることが予想されます。なお、JAXAは本学部の講義を今後関西諸大学、全国の人文社会科学系で展開する予定の「宇宙教育」のパイロットケースとして位置づけています。

研究の面では、板倉准教授を代表とするNHKアーカイブの利用プロジェクトにおけるJAXAとの共同研究が開始されています。また、JAXAの協力・サポートを受け、岡田教授、西田准教授が6月に名古屋で開催された「ISTS：国際航空宇宙工学会」で発表するなど、様々な進展を見せてています。



JAXA 相模原キャンパス見学会の様子

活動一覧

2012年度

- 1月 11日 研究部主催・第4回講演会「アラブの春とトルコのEU加盟の新たな課題」(八谷まち子・九州大学法学院教授、EUIJ九州代表)
- 1月 24日 異文化研究交流センター主催、平成24年度プロジェクト『南北アメリカにおける異文化の共存・葛藤・融合』第3回研究セミナー「ケベックの土地と人々——カナダのなかの独自の社会」(大石太郎・関西学院大学国際学部准教授)
- 2月 6日 神戸大学国際文化学研究科主催(神戸大学国際文化学研究科異文化研究交流センター共催)国際ワークショップ「政治・経済・社会の劇変とEUにおけるアイデンティティ形成」をブリュッセル自由大学(VUB)にて開催
- 2月 7日 異文化研究交流センター・ブリュッセル王立音楽院共催「第43回ベルギー研究会」を神戸大学ブリュッセルオフィスにて開催
- 2月 22日 國際部主催・第5回講演会 "Understanding Growth Strategies in Retailing: From Internationalization to the Development of New Retail Formats" (Karine PICOT-COUEY・レンヌ第一大学経営学部准教授)
- 3月 11日 國際文化交流フォーラム「自治体の文化振興はどうあるべきか——ドイツの先進事例から考える」を神戸市生田文化会館にて開催

2013年度

- 5月 10日 異文化研究交流センター『南北アメリカにおける異文化の共存・葛藤・融合』プロジェクト、メディア文化研究センター共同研究『メディアの変容と文化的公共性』プロジェクト、第4回研究セミナー「アレクシ・ド・トクヴィルの異文化体験——若きフランス貴族はアメリカで何を目撃したのか」(高山裕二・明治大学政治経済学部専任講師)
- 5月 27日 國際部主催・2013年度第1回講演会「北方フランス語圏文学の特徴と共通性」(Jean-Marie KLINKENBERG・リエージュ大学名誉教授)
- 7月 25日 研究部プロジェクト「EUアイデンティティの構築とその政治的意義」2013年度第1回講演会「ドイツ対外文化政策の変容——ヨーロッパ統合進展の中で:新たに一步か、原点回帰か」(川村陶子・成蹊大学文学部国際文化学科准教授)
- 8月 1日 研究部プロジェクト「EUアイデンティティの構築とその政治的意義」2013年度第2回研究セミナー「分断から統合へ?——ポーランド国境における『分断された領域』のシェンゲン後を比較する」(仙石学・西南学院大学教授)
- 8月 6日 異文化研究交流センター・メディア文化研究センター主催、「共創」社会研究会、第1回講演会「ベトナム反戦から内なるアジアへ」(黒川伊織・メディア文化研究センター協力研究員)



IReC NEWS

当センターの阿拉木斯(アラムス)協力研究員の論文「清代内モンゴルにおける農地所有とその契約に関する研究—帰化城トウメト旗を中心に—」が、第12回アジア太平洋研究賞(井植記念賞)を受賞し、8月2日に授賞式が行われました。

研究員活動報告

遼寧省図書館を訪れて

協力研究員 尹 永 順

私の研究課題は谷崎文学が「満洲」、特に中国語新聞「盛京時報」においてどのように翻訳され、受け入れられてきたのかを検討することである。

「盛京時報」は日本人・中島真雄が1906年に奉天（瀋陽）で創刊した「満洲」初の中国語新聞であり、1944年に「康徳新聞」に合併され、1945年に廃刊となった。2013年8月1日から8月6日にかけて、「盛京時報」の資料を集めるために、中国で唯一「盛京時報」のデータベースを有する遼寧省図書館を訪れた。遼寧省図書館は「盛京時報」の発行地であった奉天、つまり現在の瀋陽に位置している。「盛京時報」が「満洲」時代の政治、経済、文化など多様な情報を知る貴重な資料であることが認められつつ、遼寧省図書館では「盛京時報」の影印、マイクロフィルムだけではなく、データベースも構築した。このデータベースはタイトル、副題、著者名、コラム、出版年月日、巻号、ページなど様々なキーワードで検索することができるため、ほぼ40年にわたる膨大なデータを簡単に収集、統計できた。



遼寧省図書館

「盛京時報」に掲載された谷崎文学に関わる資料には、『麒麟』、『金と銀』、『春琴抄』の中国語訳、「訳者誌」、「芸拓訳言」などが見られた。これらの翻訳と文章はすべて長年文芸欄「神皇雜俎」の編集を担当した穆儒丐が執筆したものである。穆儒丐が谷崎文学を真っ先に選んだのは、谷崎潤一郎が日本を代表するような「芸術の天才」で、その作品は緻密な描写が優れていて、文芸に志す中国の青年たちに役立つと確信したからである。「芸拓訳言」でも、人生の芸術化、緻密な描写、病的な心理描写を取り上げて『金と銀』を高く評価した。また、『麒麟』、『金と銀』の中国語訳には注が一つもないが、十数年離れて連載された『春琴抄』の中国語訳には日本の語彙と文化に注がこまめに付けられているように、異なる翻訳方略を用いた。これらの資料を「満洲」の社会情勢、「盛京時報」の特徴と関連付けて、今後さらなる考察を試みたい。

「女」と近世説話——有馬妬湯

協力研究員 南郷晃子

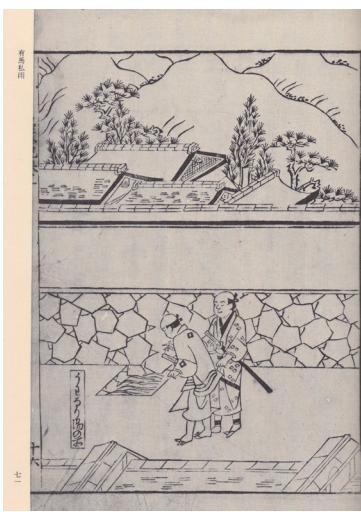
8月31日、9月1日と神戸大学で西行学会が開かれた。1日午後は有馬実地見学であり手伝いとして同行させていただいた。

有馬には伝承を伴う源泉がいくつかあり、うち一つが「妬湯」(うわなりゆ)である。『摂津名所図絵』には女子が「盛粧」をしてその前に立つと湯が沸き立つとあり、現在一般知られるのはこの伝承である。他方『有馬私雨』には、湯の前で「おのれは人のをのこぬすみとつて、さりとは卑怯ものかな」とののしると湯が沸き立つと記されている。うわなりは「後妻」とも書き、前妻が後妻を痛めつけ、湯に沈めたなどの伝承があったかと想像する。

女性の嫉妬が怪異譚へと転ずる話は近世期数多くある。好んでおぞましい女の嫉妬が語られるのは、一つには語り手が主に男性であったためであろう。しかしそれが妬湯のように



現在のうわなり湯



うわなり湯(『有馬私雨』より)

場所にともなう伝承である場合、「地母神」という言葉に象徴されるような、大地そのものを女の姿で捉えるという信仰を背後に想定することができる。突発的に湯が吹き出す源泉の「うわなり湯」という名は、意のままにならぬ大地に近世的な枠組みを与えたものと解せよう。

日本の近世期の説話で「女」は妬み、執着し、祟る。言わば男性原理のうちに表象されるが、同時に男性的な秩序を搖るがすものもある。例えば「女」の祟りで家が断絶する話は「女」が「家」の存続を決定している。祟られるのが領主家ならば国支配の交替を「女」が決定するのである。男へ執心し妬み崇る「女」の話をどう解するか。伝承世界における「女」像の再構築を目指んでいる。

人びとの暮らしに目を向けること

協力研究員 山口 隆子

私は、普通の人びとの日々の暮らしに目を向け、彼らと生活を共することによって異文化理解を目指すホームステイを研究している。2013年5月の2週間、延べ38名の日本人が、アメリカに本部を置く非営利組織「大人のためのホームステイ組織F(仮称)」の渡航プログラムで、ドイツへ出かけた。私はそのうちの男女19名(平均年齢66歳)。夫婦5組と女性同士のペアが5組)の引率責任者になり、ニーダーザクセン州の小さな町で1週間のホームステイを体験した。

グローバル化の時代で情報が溢れても、参加者の渡欧経験が豊富にあっても、多くのゲスト達の不安は、ホストの普段の生活ぶり・暮らしのありようが分からぬことだった。彼らはこれまでの団体観光旅行におけるイメージをなぞり、またステレオタイプの見方が先行しがちであり、日本から青汁やティッシュペーパーを箱ごと持参した者が数人いた。ホストから女性のペア用に「ダブルベッド」の用意があると示



「1936年から続く」民俗舞踊団を招いてのフェアウェルパーティでの一場面。

そして、ホスト側から聖靈降臨祭の3連休に「ハイキングと伝統的な射撃祭のどちらを選ぶ?」と打診があった。伝統的な行事は、日常生活のハイキングと同等に括られて、ゲストに呈示された。多くの出来事がホームステイの現場で起きている。

ゲスト達は、ホームステイ中に「食生活が豊かだし、実に心地よい暮らし」、「ホスト達も私達と同じなのだ」などといった感想を何度ももらした。



ホスト側が用意した地元の射撃祭、シュッセンフェスト(Schützenfest)。地元の人びと500名の中に20名の日本人が参加。

された時のゲスト女性達の混乱と、のちにダブルベッドとはシングルベッドがふたつ並列の状態だと理解した時の安堵感。ホストの生活を尊重し、馴染もうと努力をしても、自己文化中心主義的な視点を拭うことが難しい証左であろう。

帰国後にゲスト達から体験談を聞き取る毎日だが、時間の経過と共に、彼らの印象や感想が変化していっている。この体験をひとつの事例として、今後の研究に向けて、更なる理論の精緻化を探求中である。

中世主義と社会運動

学術推進研究員 清川 祥恵



ゴシック様式(向かって左)とロマネスク様式(同右)の尖塔をもつフランス・シャルトルの司教座聖堂。

今年度は、当センターおよびメディア文化研究センターの研究員有志と協力し、プロジェクト「コミュニティの『共創』戦略と市民的公共性」を立ち上げると同時に、国際文化研究科の教員・院生および外部の研究者と合同で行なう研究プロジェクト「世紀転換期の大西洋をはさんだ Anglo-Saxon 世界の思想交流」にもスタートメンバーとして参加させていただくことになった。いずれにも、個人研究であるヴィクトリア時代の中世主義思想、とりわけ詩人かつデザイナー、社会主义者でもあるウィリアム・モリスの文学作品にみられる思想についての研究を基盤として関わっている。

前者については、去る8月6日に第1回研究会が開催され、ベ平連こうべが世界規模の平和運動から地域に密接に結びついた社会問題へと目を向ける過程とその意義について、神戸大学メディア文化研究センター協力研究員の黒川伊織氏にご解説いただいた。10月にはひきつづき第2回研究会を実施する予定であり、さらに年内には19世紀のゴシック様式の復興運動を通して市民的公共性について考察する、私自身の研究発表を計画している。

また、9月17日には、2つ目のプロジェクトの第1回研究会を開き、成蹊大学法学部准教授の平石耕先生をお招きして、

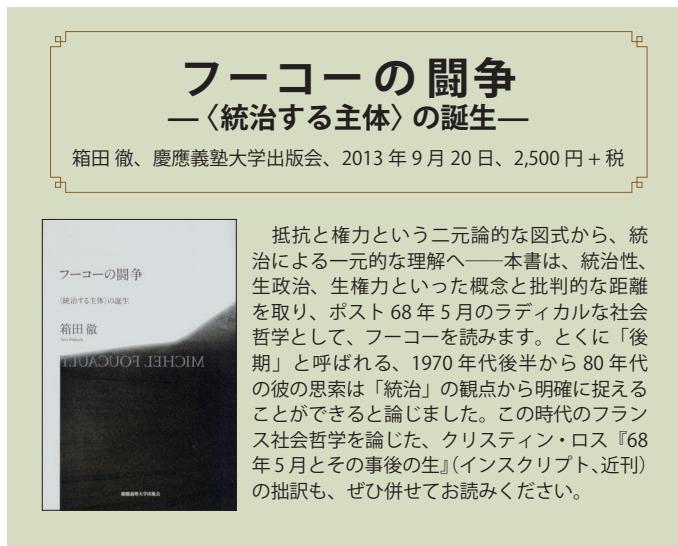


モリスが日曜集会を開いた自宅付近より、テムズ川を臨む。

高書『グレアム・ウォーラスの思想世界——来るべき共同体論の構想』(未来社、2013年)について論評させていただいた。ウォーラスはモリスが主宰する社会主义の集会に参加しており、その思想にはすくなくとも影響もみられるが、モリスとはまったくちがうかたちで20世紀初頭に深刻化する「巨大社会」の諸問題に対処しようとした。ふたりの芸術観を通しての比較を試みたところ、平石氏からは真摯なご回答とご助言を頂戴し、またプロジェクトメンバーと闇達な意見交換を行なうことができた。今後は20世紀以降の思想展開や影響関係もふまえ、より多面的にモリスの思想を検討していきたい。

研究員出版物

当センター 2009 年度学術推進研究員（現・立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員）箱田徹氏、および当センター本年度協力研究員である植朗子氏の研究成果が公刊されます。ここに著者の両氏からのコメントとともにご紹介いたします。



『ドイツ伝説集』のコスモロジー —配列・エレメント・モティーフ—

植朗子、鳥影社、2013年6月27日、価格1,800円+税

本書は、グリム兄弟の編纂書である『ドイツ伝説集』の内面を明らかにする試みとして、その伝説配列から全体の構成を論じ、伝説グループの要素となるモティーフとそのエレメントについて検討した。『ドイツ伝説集』は『グリム童話集』、『ドイツ神話（学）』と並ぶ、民間伝承蒐集のさきがけとなった作品であるが、文学的視点に立った研究はこれまでなされてこなかった。しかし、伝承の海から拾い上げられた数々の伝説は、『ドイツ伝説集』のかたちをとって、その自然観ひいては宇宙観（コスモロジー）を織りなした。



異文化研究交流センター ニュースレター 第4号

登行日:2013年9月30日

編集・発行：神戸大学大学院国際文化学研究科・異文化研究交流センター

連絡先：〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1-2-1

電話・FAX：078-803-7650

E-mail : irec@ccs-srv.cla.kobe-u.ac.jp

ウェブサイト：<http://web.cla.kobe-u.ac.jp/group/IReC/>

印 刷 所：神戸大学生活協同組合

2013年10月以降の予定

2013年

- 10月1日 国際部主催・2013年度
第2回講演会 "European
Vision of the global
geopolitical dynamics
in comparison with the
Asian (and Japanese)
perspectives" (Fabrizio Eva
ヴェネツィア カ・フォス
カリ大学客員教授)



- 10月30日 異文化研究交流センター・メディア文化研究センター主催、「共創」社会研究会、第2回研究発表会

このほか、11月以降も講演会・セミナーを含む多数のイベントを企画しております。詳細が決定しましたら、当センターのウェブサイト等で告知させていただきます。

編集後記

今年度のニュースレターは例年より早い9月末の発行ということで、記載する内容がすくないので、と密かに危惧しておりましたが、受賞や出版などのおめでたいニュースが相次ぎ、大変充実した号となりました。原稿をお預けいただいた皆様のご協力に、この場を借りて御礼申し上げます。今秋以降の活動にもご期待いただければ幸いです。

(学術推進研究員：清川 祥恵)



◆交通アクセス：阪神「御影」、阪急「六甲」、JR「六甲道」下車。
市バス 16 系統「六甲ケーブル下」行に乗車。
「神大國際文化学部前」下車。徒歩 3 分。